NO. 51
October '11
Newsletter
神戸女学院大学
女性学
インスティチュート

谷 祝子 先生（神戸女学院大学名誉教授）特別講演会によせて

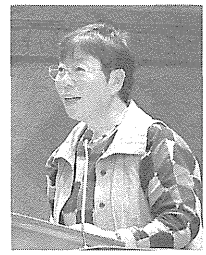
金 山 千 広

女性学インスティチュートでは、去る５月27日に本年度神戸女学院大学名誉教授に就任された谷 祝子 先生による「神戸女学院大学生気質の変遷」と題した特別講演会を開催しました。そこでは本学における体育教育の歴史的展開と、先生が43年間にわたり多くの学生と接してこられた観点から、貴重なお話をうかがうことができました。

先生は、まず神戸女学院の体育を、校章の三つ葉のクローバーの一葉である“身体”を担う立場にあると解説されました。特に学生生活の最終段階で展開する大学体育は、生涯体育に向けた知識の習得と授業を通して多くの友人を作るというプロセスを踏まえて、人間形成を育むことに意義があるとされました。そして、体育嫌いを含む全ての学生に対して、楽しい経験を育んで社会に送り出すことが重要であると付け加えられました。

体育の運営にはハードウェアとしての運動施設や付帯施設が不可欠です。またそれは、時代の流れを反映します。先生は、震災を乗り越えて2008年に竣工した第三体育館に対する深い思いや、今は撤去された屋外プールの夏休み開放が教職員によるボランティアにて成り立っていたこと等、施設にまつわるエピソードを添えてお話し下さいました。

本講演の中心である学生気質の変遷については、まず、“見てきて感じた事柄アラカルト”として、授業、礼拝、課外活動等の具体例を通した“立ち居振る舞い”の変化を指摘されました。例えば、赴任当時の学生は、授業時間が50分であったにもかかわらず、バレーボールコートの準備からプレイ終了後の片付け、その後のモップ掛けまでを全てこなし、なおかつ授業開始前には自主的に運動を楽しみ、整列して教師を待っていたそうです。加えて、当時の学生は今の学生よりも積極的で、与えられた時間を上手に使っていたことや、満席の学校礼拝、地方を回るキャラバンに率先して参加した様子を伝えられました。クラブ活動や学生自治会も活発で、クラブへの昇格に際するハードルも高いようでした。近年では、ライフスタイルの変化に伴い、クラブに入る学生数が減少傾向にありますが、以前は、クラブに所属する学生が、多くの場面でリーダーシップを発揮していたようです。


谷 祝子 名誉教授

続いては、研究的視点を含めた“からだ”の変化として、体力の推移が報告されました。本学の体育は、1956年より授業内容に体力測定を導入しています。

年度毎に横断的検討を重ねた結果からは、体力の脆弱化傾向を把握したことを述べられました。そして、若い世代の体力低下が問題視されるようになった2000年代からは、学生のライフスタイルを「健やかさ」をキーワードに考察してきたことを加えられました。特に「しんどい」を連発する“いまどきの学生”については、姿勢の悪さや通学に際しての相乗りタクシーの常態化を懸念されました。これらは、大学体育連合近畿支部会が実施した「大学生のライフスタイルと健康・体力の実態に関する調査研究」に報告されています。なお、本学の体力測定は、学生自身が自己の体力を認識し、生涯にわたる健康・体力づくりに取り組む動機づけの一助として、現在も継続しています。

さて、歴史ある神戸女学院大学の体育研究室では、本学体育史の編纂を通して文化としての女子体育を探求しています。先生は、学生の積極的な取り組みを、愛校心やボランティア精神の表層化として捉え、学生が醸し出す品性や輝きの背景には、神戸女学院大学の学生としての“誇り”が存在すると述べられました。そして、「変わらなければならないものがある。また、変わってはいけないものもある。」と締めくくられました。

神戸女学院大学の体育教育は「女子の体育は女子の手で」という先人の思いがあります。

私は本年度、谷 祝子 先生の後任として体育研究室に着任しました。良きご縁に恵まれ神戸女学院大学に導かれたことに感謝しております。女子教育のパイオニアにおいては、三つ葉のクローバーの一葉である“身体”を担う体育教育を継承しつつ、多様化するライフステージに対応できる“誇り高い女性”を育めるよう研鑽に励みたいと思います。（体育研究室教授：体育学）

連続セミナー
「アジア・アフリカに学ぶ神戸女学院生」

【第１回：2011年６月10日】……金田知子

●「エチオピア体験学習での学び、そして今
　―子どもの教育と女性の生活を中心に―」

第１回目のセミナーでは、私の元ゼミ生である石井亜紀子さん（神戸女学院中高部・職員）と南佳枝さん（京都大学大学院・学生）に発表していただきました。お二人は、私が2008年２月にゼミ生を対象に企画・実施したエチオピア体験学習ツアーの参加者です。

石井さんからは、エチオピア体験学習ツアーの概要と、現地で訪問した国際協力機構（JICA）のManaBUプロジェクトについて報告がありました。ManaBUとは、オロモ語で「コミュニティの学び舎」の略です。このプロジェクトは、行政の力がなかなか及ばない地域で、住民が主体となって行政と協力しながら行う、基礎教育充実のための住民参加型プロジェクトです。ManaBUプロジェクトは、基礎教育の量的拡大、中退率の低下、基礎教育への住民の関心の高まりといった様々な成果をあげているとのことでした。

次に、南さんは、大学院生として行ったエチオピアでのフィールドワークについて発表してくれました。彼女は、神戸女学院大学の学生のときにエチオピア体験学習ツアーに参加したことで同国に対して強い関心を抱くようになり、その後京都大学大学院に進学しました。彼女が現在進めているのは、エチオピアのアリ人と呼ばれる人々が日常生活で使用している「もの」に着目した研究です。今回の発表では、村につながる道ができたことによって、外からの「もの」が大量に流入するようになり、アリ人の女性たちの生活がいかに変化したのかを話してくれました。結果としては、従来から用いられてきた土器、木工品、竹製品などの「もの」が外からもたらされたプラスティックなどの「もの」に置き換えられているというよりは、地域内の「もの」と並行して、外からの「もの」を使用している傾向があるとのことでした。また、女性たちの多くは現金稼得手段を有しており、それにより積極的に生活で使用する「もの」が購入されているとのことでした。

アフリカは、日本人にとって、地理的にも心理的にもまだまだ遠い所かもしれません。しかし、今回のお二人の発表を通して、アフリカという遠い存在を、より身近なものに感じていただけたのではないかと思っています。「アフリカの水を飲んだ者はアフリカに帰る」という言葉があります。一度でもアフリカに行くと、その自然、人々、生活、文化に魅了され、その後何度もアフリカを訪れるようになる人が少なくないそうです。アフリカに魅せられたお二人の発表から、アフリカの魅力をまさに肌で実感することができた、有意義なセミナーでした。　（文学部准教授：社会福祉学）

【第２回：2011年６月17日】……北川将之

●「住居建築ボランティア―アジアからの学び―」

劣悪な住環境にある人々への支援として、家屋を建て提供する取り組みを行っているNGOがあります。この住居建築ボランティアは、世界100カ国で、毎年実施されています。今回は、インドネシアとインドで活動を行った本学学生が、その経験を通して学んだことをお話ししました。報告は、総合文化学科の飯遥、大川真世、安部珠実、黒川みなと、須本佑美の５名で行いました。

まず司会の須本が報告の流れを説明した後、住居建築ボランティア団体であるHabitat for Humanityについて安部が話をしました。この団体は活動理念として「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」を掲げ、信仰・人種・性別等の背景を問わず、住まいを必要としている人々と共に住居建築を行い、地域コミュニティを構築することを目標としています。次に、具体的な活動例を２つお話ししました。

第一に、インドネシアでの活動を大川が紹介しました。インドネシアのバリに滞在して、村役人の家族のマイホーム建築を手伝いました。現地では、溝の水で体や服を洗う姿を見たり、プラスチックは土に戻ると語る人に出会って、衝撃を受けました。近代化や教育の役割とは何か、多くのことを考えさせられました。また、現地の人々との触れ合いを通して、人と人との絆の強さが、豊かさの一つであることに気づきました。

第二に、インドでの活動について黒川が報告しました。インド南部のバンガロール郊外の農村で、家の基礎工事にあたる溝掘り等を中心に作業をしました。また、現地の小学校も訪問しました。村の子どもの中には、学校に通っていない子もみられ、教育格差があることがうかがえました。タンクから零れる水を飲む子、私達のランチの残りを食べたいと言う子に出会って、現地の子どもたちの健康面も心配になりました。教育・健康・所得の面で、現地の人々が直面している「貧しさ」の意味を現実的に考える契機となりました。

最後に、これらの活動に長く携わってきた飯が、「ワークキャンプ」の意義について話しました。労働力を提供するという意味をもつワークキャンプは、近年注目されています。ワークキャンプでは、ボランティア団体が何かを「与える」だけでなく、相手から何かを「得る」ことも多々あります。最近では東日本大震災の被災地で、幾つものワークキャンプが実施されていますが、そうした活動にも参加することで、過酷な状況に置かれた人々に「一人ではない」という応援のメッセージを送ることができればと願っています。

（文学部専任講師：国際関係論）

平安時代の女性の中にも…

藏中　さやか

平安時代の女性というと、一般に、物言わぬお人形、深窓の令嬢といったイメージを抱く人が多い。しかし、すべてがそうではない。懸命に学んだ人や強い意志をもって生き抜いた人もいる。

出産後宮中に戻る中宮彰子は、父藤原道長の差配により『源氏物語』かとも推定される新調の物語冊子や『古今集』、『後撰集』等の歌集を持ち帰った。これらは、天皇の心を魅了する女性にふさわしい教養が和歌であり、そのような女性を育むものが物語であると当時理解されていたことを表していよう。この彰子に『白氏文集』の一部を講じたのが紫式部自身であったと『紫式部日記』は語る。中宮彰子の学びが純粋な学問的興味の発露であると断定はできないが、漢籍を学ぶということにも積極性を示したことは注目すべき点である。また『枕草子』に登場する宣陽殿女御芳子は、習字と七弦琴の演奏に加え『古今集』二十巻の暗記を「御学問」にするようにという父の教えをうけている。このころの高貴な女性の教育係で、今風に言えば〈働く女性〉でもあった紫式部や清少納言は、仮名で文章を綴るだけではなく、漢詩文も読解していた。育った家庭環境によるところが大きいとはいえ、受領階級の父を持つ彼女らにとって、学びは自身の傍らにあり、我が身に備えた才学こそが自身を他から際立たせるものとなることを十分に理解していたに違いない。

一方、結婚や恋愛に対して明確に自己主張をする女性もいた。和泉式部の恋の相手であった敦道親王の妻の一人は、父母亡き後、自分の意志で親王との結婚を決めたのだと『大鏡』に載る。また源平の合戦の時代を生き抜いた建礼門院右京大夫は、その若き日、身近な女性たちが恋に煩悶する姿を見て、絶対に恋愛なんてするまい、と心に誓った。『大和物語』や『源氏物語』の中には結婚拒否の女性たちも造型されている。

社会構造の異なる現代を生きる女性たちと同列に比較することは意味のないことではあるけれど、平安女性の生きた道を思うとき、千年ほどの時の流れはさほど遠いものではないのかもしれないと感じる。限られた階層の、しかも一握りの少数派であっても、彼女らもまた、学ぶことの意味を知り、自己の生きる道を探る強さを備え自身の心に従って生きたことを忘れたくはない。

（文学部教授：日本文学）

女性誌を読むこと

河西　秀哉

私は博士論文で、現在の天皇と皇后の結婚（1959年）前後に起こったミッチー・ブームが象徴天皇制の一つの到達点だとの仮説を立て、当時の週刊誌を史料として検討しました。週刊誌は東京の国立国会図書館に数多く所蔵されており、大学院生の時には何日も通って、１冊ずつ見て皇室記事を探していました。

国立国会図書館は基本的に閉架式で、自分が閲覧したい書籍や雑誌を請求し、書庫から出納してもらうスタイルの図書館です。今でこそパソコン上で閲覧請求ができますが、その頃は紙に書名を書いて、それを図書館職員の方に直接手渡していました。

週刊誌と言えば、当時創刊され始めたのが、女性週刊誌とカテゴリーされる『週刊女性』や『女性自身』などです。これらの中では、美智子妃のファッションがグラビアで取り上げられるなど、ブームを牽引する役割を果たしていました。当然私もそれら女性週刊誌の内容を分析するため、閲覧請求をしました。

すると、閲覧請求票を見た職員の方から、「え、女性週刊誌ですか？」と尋ねられました。私はそれに対して「ええ、研究のために見るんです」と答えたと記憶しています。その後出納された雑誌を取りに行ったところ、先程とは別の職員の方から、「本当に女性週刊誌を請求されたんですか？」と再び言われたので私はややうんざりして、「研究のための閲覧なんです！」と強く言って雑誌を受け取りました。

おそらく図書館職員の方の頭の中には、女性週刊誌＝女性のみが読む雑誌という図式があったために、若い男性である私がそれを請求したことを不思議に思われ、間違っていないか確認する上でも、私に尋ねたのでしょう。私自身が強く言い返したのも、こうした図式が私の中に前提としてあり、研究上必要であって私は例外なのだと言いたかったからに他なりません。

では、このような図式はどのようにして形成され、定着したのでしょうか。これ自体、戦後のジェンダーの問題を考える重要なテーマだと思われます。それは、私の今後の研究課題の一つにもなっています。

（文学部専任講師：日本近現代史）

2011年度 スケジュール

■講演会・セミナー（一般・学生対象）

5月	**特別講演会 「神戸女学院大学生気質の変遷」**
	5／27（金） 10:35～11:25 神戸女学院講堂 講演者：谷 祝子 名誉教授 参加者：160名
6月	**連続セミナー「アジア・アフリカに学ぶ神戸女学院生」（全4回／6月・11月開催） JD-104**
	6／10（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：文学部 金田知子 准教授） 第1回 「エチオピア体験学習での学び、そして今 —子どもの教育と女性の生活を中心に—」 報告者：石井亜紀子 氏（神戸女学院中高部職員） 南 佳枝 氏（京都大学大学院研究科学生） 出席者：一般15名、学生9名 計24名
	6／17（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：文学部 北川将之 専任講師） 第2回 「住居建築ボランティア —アジアからの学び—」 報告者：ボランティアサークル部員学生、現地参加本学学生 出席者：一般14名、学生11名 計25名
10月	**学外講演会（全2回） 西宮市大学交流センター（西宮北口 ACTA東館6階）**
	10／6（木） 10:30～12:00 ＊申込不要 第1回 「なぜ つまずいてしまうのか？ —Be動詞—」 講演者：文学部 白井由美子 専任講師
	10／13（木） 10:30～12:00 ＊申込不要 第2回 「日本の国際貿易のあり方 —強まるアジアとの相互依存関係」 講演者：文学部 FUKUSHIMA Marcelo 専任講師
11月	**連続セミナー「アジア・アフリカに学ぶ神戸女学院生」（全4回／6月・11月開催） JD-104**
	11／4（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：文学部 石川康宏 教授） 第3回 「私たちは『慰安婦』問題をどう考えるか」 ＊申込要 報告者：石川ゼミ学生
	11／11（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：文学部 北川将之 専任講師） 第4回 「インド体験学習で学ぶ」 ＊申込要 報告者：北川ゼミ学生

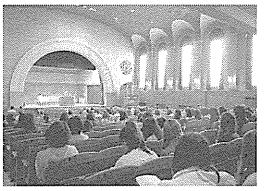
■学生対象プログラム

年間	授業 Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」 Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」
	インターディシプリナリー・プログラム （申請締切：2011年10月14日（金）・2012年3月6日（火））
7月	第13回「女性学インスティチュート賞」 学生懸賞論文（締切：2011年7月8日）

■発行物

10月	newsletter №51 発行
3月	newsletter №52 発行
	『女性学評論』第26号 発行

<5/27 特別講演会>



<6/10 連続セミナー 第1回>

<6/17 連続セミナー 第2回>

編集・発行：神戸女学院大学 女性学インスティチュート

編集委員：飯田祐子、井上紀子、津上智実、米田眞澄（委員長）
編集事務：藤谷悦子、吉永真理子（ABC順）
〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL 0798-51-8545 FAX 0798-51-8527
URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/ e-mail : wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp